The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	同性友人に感じる魅力が関係継続動機に及ぼす影響 : 個人にとっての重要性の観点から
Author(s)	西浦, 真喜子; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 115-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10703
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 10, 2010

同性友人に感じる魅力が関係継続動機に及ぼす影響 1)

―個人にとっての重要性の観点から―

西浦真喜子(大阪大学大学院人間科学研究科)
大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究の目的は、同性友人に感じる魅力を因子分析から明確にすること、および、各因子に対する個人にとっての重要性の観点から、魅力が関係継続動機にどのような影響を及ぼすのかを検討することである。202 名の男女大学生を対象に、質問紙調査を行った。親しい同性の友人 1 名について、予備調査に基づいて選定された友人の魅力 30 項目、関係継続動機への回答を求めた。また、友人の魅力については自分が重要視する程度についても回答を求めた。結果、友人の魅力は、安心感、よい刺激、誠実さ、自立性の 4 因子構造であった。次に、魅力因子を重要視する程度からクラスター分析を行い、対象者を安心感重視、刺激重視、自立性重視、非重視の 4 群に分類した。各群で、魅力因子が関係継続動機に与える影響を見たところ、自立性重視群ではよい刺激が最も関係継続動機に影響を与え、他の 3 つの群では、安心感が最も影響を与えていた。最後に、友人に感じる魅力と関係継続動機との関連について考察した。

キーワード: 同性友人、対人魅力、関係継続動機、個人にとっての重要性

問題

本研究の目的は、友人の魅力の因子構造を明らかにすること、および、魅力諸因子のいずれを重要と考えるかによって、関係継続動機に及ぼす影響が異なるのかを明らかにすることである。

対人魅力研究の対象

対人関係を維持することは社会に適応するために重要なことであるが、容易には達成できない。例えば、日本の離婚率の推移は、2002 年の 289,836 件をピークに減少傾向にあったが、2009 年には前年より増えている(厚生労働省, 2010)。また、中学生が友人関係の崩壊を恐れるあまり、本音を開示できず表面的な付き合い方を志向するという問題も指摘されている(落合・佐藤, 1996)。それゆえ、現在維継続中の関係においても、魅力を維持し、関係を継続させる要因を明らかにすることが肝要である。

しかし、対人魅力研究は、Byrne(1971)のパラダイムを用いた関係の初期段階を扱うものが多かった。関係の継続を扱っていても、異性関係が対象となることがほとんどである。Sprecher(1998)は、この関係の段階と性別の 2 点が対人魅力研究の問題であると述べている。そこで、恋人や夫婦を対象とした魅力の規定因に関する研究(e.g., Aron, Dutton, Aron, & Iverson, 1989)と同様に、同性の友人関係における魅力の規定因を検討した。しかし、規定因を探ると同時に、その友人に感じる魅力がどのようなものがあるかを検討する必要があろう。

同性友人関係に関する研究

友人の概念として、楠見・狩野(1986)は発達段階別にその因子構造を検討したところ、どの段階にも「社会的望ましさ」と「明朗性」または「外向性」が共通してみられた。基本的に、友人とは「明るくてよい人」と考えられている。さらに、発達段階が進むにつれ、特に大学生になると友人概念についての因子構造が複雑になり、多次元的に友人を捉えるようになることも示されている。他にも、同様に友情の基本的な構造について明らかにしたものがあるが、友人には肯定的な感情だけでなく、反感や嫉妬などの否定的な感情も存在する(山本, 1986)。また、La Gaipa(1977)は、友情を構成する要因として自己開示と信頼性、Davis(1985)は、楽しみ、受容、信頼、尊敬、相互援助、秘密の共有、理解、自発性を友情の本質的な特徴として挙げている。

このように、友人がどのような存在であるかを明らかにする基本的な研究に加え、友人関係にみられる特徴についても多くの研究がある。例えば、友人の親密さを生む相互作用パターンとして自己開示や感情的なサポートが期待されている(Fehr, 2004)。日本でも、和田(1993)は、同性友人に期待していることを調査した結果、言いたいことが言い合えたり、利害関係なく付き合えたりするという「真正さ」が最も強く期待されていることを見出した。そのほかに、「尊重」、「協力」、「自己向上」、「自己開示」なども期待されていた。

これらの研究において、友人の特徴は見出されてはいるものの、その特徴がいかに関係継続に寄与しているかまでは明確にされていない。また、Fehr(2004)は場面想定法を用いて自己開示や感情的なサポートが期待されないと関係の悪化を招くことを示しているが、生態学的妥当性の観点から考えて、実際の友人関係を対象として検証する必要があろう。

友人に対して感じる魅力

魅力の文脈で友人を捉え直すにあたり、魅力の定義を考えておく必要がある。

対人魅力は態度概念である (Berscheid & Walster, 1969)。すなわち、感情、認知、行動の3つの要素から成り立つものであるとされている。Rubin(1970)は、愛の概念として「ある特定の他者に対して、考え、感じ、行動しようとする傾向を含んだ、その他者に対してもっている態度」(Rubin, 1970, p.265)と定義している。また、Huston(1974)は、対人魅力を「(a) ある人がもつ別の人に対する心情(sentiment)の強さと質の評価的な要素、(b) ある人がもつ別の人に対する信念、その信念が形成された認知的過程、(c) ある人が別の人に接近したり回避したりする傾向、行動的要素」(Huston, 1974, p.11)と定義している。本邦においては、中村(1996)が、対人魅力は関係発展の原動力となると述べている。対人魅力は関係開始のきっかけともなるが、同時に関係維持における力にもなり得ると考えられる。そこで、確立された関係における対人魅力においては、関係を継続させたいという動機を高揚させる点に注目すべきである。

また、異性の対人関係では魅力の要因として外見がよく挙げられる(e.g., 松井・山本, 1985)が、友人関係ではあまり重要な要因としては挙げられていない。戸田(1994)の研究では、外見的な魅力の影響は関係の初期には重要であるが、その後はあまり長く続かないことが示唆されている。関係維持段階、すなわち、関係が長期に及ぶと外見的要素よりも内面が重要となってくることが示唆される。併せて、青年期が人の内面に注目する段階であることからも、内面的な要因に焦点を当てることは妥当であると考えられる。そこで、本研究では友人の魅力を、関係継続に関わる内面的な要因と定義する。

これまでの多くの研究では、対人魅力は多面的なものとされており、その因子構造がいくつかの研究において示されている。例えば、藤森(1980)は、「親密」、「交遊」、「承認」、「共同」の 4 次元を見出し、また、中村(1988)の対人魅力尺度では、「情緒的魅力」、「相互作用志向」の2次元を見出している。林(1978)は、対人魅力の前提として対人認知の基本次元を検討した。その結果、「感じのよい－感じの悪い」などの 15 個の形容詞対を用いて「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」、「力本性」の基本的な3次元を見出した。これらにより、相手の魅力判断には大まかに「感情的に好き」、「能力が高そう」、「社会的にいい人である」という3つの側面が存在すると考えられる。

そこで、本研究においても、友人の魅力を 1 次元と捉えるのではなく、その多面性に注目する。友人の魅力について、自由記述による調査から項目を収集し、因子分析を用いてその構造を明らかにすることが本研究の第一の目的である。

個人にとっての重要性という視点

態度項目の類似性と魅力の関連を検討した研究において、個人にとって重要な態度が類似している場合と重要でない態度が類似している場合では、その影響が異なることが示されている(藤森, 1980; 奥田, 1993b)。藤森(1980)は、類似性の操作に関して、重要とされる項目の類似性を操作したものとそうでない項目の類似性を操作したものを用意した。その結果、類似性の主効果は強く再現された。一方、重要性の効果は一貫していなかった。

藤森(1980)は、態度の重要性の効果を参加者間で検討していた。しかし、重要性効果は回答者間と回答者内とで効果に差がみられる(奥田, 1993a)。そこで、奥田(1993b)は重要性を類似性－魅力の調整変数として扱い、その効果を検証した。重要性が回答者内変数の場合、すなわち 1 人の人が重要性項目について類似している他者と非重要性項目について類似している他者を判断した場合、重要性項目について類似である他者の方を好意的に評価していた。奥田(1999)では、さらに回答者間計画と回答者内計画で重要性についての検討を行い、回答者内計画において重要性は類似性と魅力の関係に影響することを明らかにしている。また、対人魅力に関する研究に限らず、個人にとっての重要性に着目することは意義がある。例えば、個人にとって重要な側面での自己認知は自尊心と特に強いかかわりがある(遠藤, 1992)。

このように、個人が重要と考えるものとそうでないものとでは、及ぼす影響の強さが異なる可能性が十分に考えられる。本研究では、まず魅力の因子構造を明らかにし、次に、それらを重要性の視点から考える。すなわち、魅力の各因子のうち、個人にとって重要なものとそうでないものとで関係継続に及ぼす影響が異なるか、異なるとすればどのように異なるのかを検証することが、本研究の第二の目的である。

方法

予備調査

現在の大学生が、友人に対してどのように感じているのかについて自由記述形式により調査を行った。

男女大学生を対象に質問紙調査を実施した。大学の講義終了時に調査への回答を依頼し、その場で回収を行った。54 名から回答が得られた(男性 17 名、女性 36 名、不明 1 名)が、明らかに年齢の外れている 56 歳のデータを除外し、有効回答数は 53 名とした(平均年齢 22.46 歳、標準偏差 5.02)。

質問項目は 2 つあり、「あなたが友人に求めるものは何か」と、実際の親しい友人を 1 人想起してもらい、「その友人に関する好ましい部分はどのようなところか」というものであった。どちらも思いつくだけ、できるだけ多く記述してもらった。やや抽象的な問いであったことを考慮し、最初の問いの文末に例として、「例: 相談にのってくれる、自分を頼ってくれる、まじめさ、行動力、など」と付け加えた。これらの例は楠見・狩野(1986)より、大学生の友人概念についての項目のうち、各因子から最も因子負荷量の高いものを抜粋した。なお、今後 1 つ目の質問を友人に求めるもの、ということから「期待領域」、2 つ目を現実の友人に対する好ましい部分ということから、「現実領域」と呼ぶ。

また、2 つ目の質問に想定した相手の性別をたずねる項目を付け加えた。回答者の 95%以上が同性を想定して回答していた。

なお、記入年月日、所属・学年、性別、生年月日などについても回答を求めた。

得られたデータを Word Miner (R) Ver. 1.01e にて分析した。まず、単語の統一作業を行い、項目を抽出した。次に、頻度が 1 のものを除き、期待領域では 268 個の項目から 65 個、現実領域では 204 個の項目から 50 個を選定した。さらに、これらの項目について領域ごとに対応分析を行った。得られた成分スコアを SAS 9.1.3 を用いて、クラスター分析を実施した。2 つの領域ともに挙げられた項目、各領域にのみみられた項目から、最終的に 30 項目を選定した。

本調査

調査時期 2008 年 1 月。

調査対象者 近畿圏の大学で心理学の講義を受講する男女大学生を対象として、質問紙による調査を行った。202 名(男性 104 名、女性 98 名)から回答が得られた(平均年齢 21.20 歳、*SD* = 1.82)。

手続き 授業終了時に調査への依頼を呼びかけた。依頼の際には、回答が任意であることなどの倫理的な説明を行った。回答時間はおよそ 10 分程度であった。回収はその場で行った。

質問紙の構成 回答には、「同性の親しい友人」1 名について、以下の質問に回答してもらった。

相手との関係 「高校時代の友人」を回答例として挙げ、想定された友人との関係を記入した。

交際期間 親しくなってからの期間を何年何カ月かで記入した。

主観的親密感 想定された友人との親密さを、「7. 非常に親密～1. 全く親密でない」までの 7 件法で回答した。また、IOS 尺度(Inclusion of self, Aron, Aron, & Smollan, 1992)を用いて親密さを測定した。IOS 尺度は 2 つの円を自己と他者と見立て、その重なりの面積が 7 段階で広がるように作成された尺度である。

客観的親密さ RCI(Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989)より「接触頻度」と「影響の強さ」(久保, 1993 による)を回答した。RCI は親密さを主観的に評価するのではなく、客観的に、すなわち行動的な側面から親密さを捉えようとするものである。接触頻度については、1 カ月に会う回数、1 回あたりに過ごす時間、1 カ月に電話する回数、1 回あたりの通話時間、1 週間当たりのメール送受信数、を記入した。影響の強さは、「生活に与える影響の強さ」と「考え方に与える影響の強さ」についてそれぞれ 7 件法で回答した。

関係継続動機 想定された友人とどの程度関係を続けたいと思っているかを「7. 非常に続けたい～1.全く続けたくない」までの 7 件法で回答した。

友人の魅力 予備調査で収集・選定した 30 項目からなる友人の好ましい特徴について、想定した相手が該当するか否かの回答を「5. 非常にあてはまる～1.全くあてはまらない」までの 5 件法で回答を求めた。最後に、同じ 30 項目について、回答者自身が親しい同性の友人に感じる魅力を判断する際にどの程度重要であるかについて「5. 非常に重要である～1.全く重要でない」までの 5 件法で回答を求めた。また、上記の項目以外にも質問項目が含まれていたが、本稿の主旨とは関連がないため割愛する。

結果

想定された友人の基本項目

想定された友人がどのような親密さの友人かを確認するために、各変数の記述統計量を Table 1 に示す。主観的親密感は平均で 5.96 と理論上の中央値である 4 より大きく、主観的に親密な友人が想定されている。交際期間は平均 5 年 3 ヵ月であり、月に平均 8 回ほど顔を合わせ、2 人でも平均 3 回ほど会うような友人である。また、大学や高校時代の友人が多く想定されていた。

Table 1 想定された友人の主観的親密感、交際期間、接触頻度、影響の強さ、IOS の平均値と標準偏差

	M	*SD*
主観的親密感	5.96	0.88
交際期間(月)	63.73	53.87
会う回数(回/月)	7.99	8.03
2人で会う回数(回/月)	2.95	4.09
過ごす時間(分/回)	274.67	278.66
電話の回数(回/月)	1.38	2.70
通話時間(分/回)	17.19	40.51
メールの回数(回/週)	6.18	16.07
影響の強さ(生活)	4.40	1.35
影響の強さ(考え方)	4.56	1.36
IOS	3.86	1.34

魅力項目の因子分析

同性友人に感じる魅力(30 項目)について、個人にとっての重要さの程度を回答したものについて因子分析を行った(主因子法、Promax 回転、共通性の初期推定値 SMC を用いた)。固有値の減衰状況から4因子が適当であると判断された。次に、共通性の著しく低い項目と因子負荷量が複数の因子にまたがっている項目を除外し、残った 26 項目に対して再び因子分析を行った。その結果を Table 2 に示す。

第 1 因子は「気兼ねしないでいられる」、「一緒にいるのが楽だ」などの項目に負荷が高いことから「安心感」と命名した。第 2 因子は「向上心がある」、「努力家である」などの項目やに負荷が高いことから、「よい刺激」と命名した。第 3 因子は「うそをつかない」、「誠実である」などの項目に負荷が高いことから「誠実さ」と命名し、第 4 因子は「束縛しない」、「適度な距離を保っている」などの項目に負荷が高いことから「自立性」と命名した。

個人にとっての重要性を回答したものについては、因子分析の結果、Table 2 のような因子構造が得られた。しかし、実際に想定した友人がどの程度当てはまるかを回答したものについて因子分析を行うと、明確な因子構造が得られなかった。そのため、重要性を回答したもので抽出された因子構造に基づいて因子を定めた。実際の友人がどの程度各項目に当てはまるかについての回答値は、各因子の平均値を算出し、それぞれの因子合成得点を作成した。魅力の各因子と、主観的親密感、接触頻度、影響の強さ、関係継続動機、IOS がどの程度関連するのかをみるために、ピアソンの積率相関係数を算出した。その結果を Table 3 に示す。

主観的親密感、関係継続動機は、魅力の因子のすべてと有意な正の相関がみられた(rs = .13 - .58, ps < .05)。影響の強さの 2 項目については、安心感、よい刺激、誠実さの 3 つの因子とは有意な正の相関がみられたが(rs = .19 - .34, ps < .05)、自立性との相関は有意ではなかった。

IOS については、安心感と誠実さのみ有意な正の相

Table 2 友人の魅力 30 項目の因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	h^2
27. 気兼ねしないでいられる	**.85**	-.10	.00	.12	.70
29. 一緒にいるのが楽だ	**.82**	-.12	-.02	.19	.67
24. 一緒にいると落ち着く	**.81**	-.01	.00	-.04	.65
23. 飾らない態度で接してくれる	**.69**	.08	-.09	.03	.46
6. 一緒にいると楽しい	**.66**	-.11	.15	.01	.51
26. 頻繁に会わなくても自然に話せる	**.61**	-.03	.18	.03	.50
19. 一緒に過ごせる	**.54**	.05	.08	.02	.36
10. おもしろい	**.52**	.26	-.15	-.05	.35
9. 話をよく聞いてくれる	.36	.24	.23	-.22	.46
25. 穏やかである	.31	.12	.20	-.02	.25
17. 向上心がある	-.19	**.78**	.17	.14	.63
21. 努力家である	-.12	**.73**	.14	-.05	.56
8. 自分にはないものを持っている	.04	**.72**	-.08	.10	.52
15. 尊敬できる	.04	**.68**	.13	.06	.55
14. 刺激になる	.23	**.66**	-.10	.17	.57
28. 予想できない行動をとる	.08	.56	-.46	.00	.37
11. うそをつかない	.00	-.10	**.78**	.03	.58
3. 誠実である	.01	-.05	**.71**	.25	.53
4. 思いやりがある	.18	.06	**.59**	.18	.54
16. 約束を守る	.11	.01	**.59**	-.07	.44
18. 常識がある	-.13	.14	**.54**	.01	.29
12. 互いに信頼できる	.29	-.05	**.52**	-.06	.48
13. 束縛しない	.11	.25	.05	**.57**	.43
7. 適度な距離感を保っている	.09	.12	.11	**.51**	.31
5. 相談相手になってくれる	.31	.12	.26	-.35	.43
22. しんどいときに支えてくれる	.24	.22	.23	-.37	.42
α	.88	.85	.82	.62	
Factor2	.34				
Factor3	.50	.29			
Factor4	.06	-.04	-.06		

Table 3 魅力の各因子と主観的親密感、接触頻度、影響の強さ、関係継続動機、IOS との相関係数

	安心感	よい刺激	誠実さ	自立性
主観的親密感	.52**	.22*	.36**	.13*
期間	.15*	.03	-.02	-.05
会う回数(回/月)	-.14*	-.05	.01	.03
2 人で会う回数(回/月)	-.05	-.08	.05	.07
過ごす時間(分/回)	.15*	.11	.10	.02
電話の回数(回/月)	.02	-.05	-.02	.01
通話時間(分/回)	.22**	.13**	.16*	.06
メールの回数(回/週)	-.05	-.14*	-.07	-.15*
影響の強さ(生活)	.29**	.19*	.27**	-.02
影響の強さ(考え方)	.30**	.34**	.32**	.04
関係継続動機	.58**	.39**	.46**	.28**
IOS	.33**	.10	.19*	-.05
M(*SD*)	4.39(0.55)	3.95(0.72)	4.14(0.66)	4.32(0.63)

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 4 関係継続動機を従属変数とする重回帰分析
標準偏回帰係数と決定係数

	安心感	よい刺激	誠実さ	自立性	
β	.43**		.17*		$R^2 = .38$

* $p < .05$ ** $p < .01$

関関係がみられた(*r*s = .33, .19, *p*s < .05)。また、会う回数は安心感とのみ弱い負の相関がみられ($r = -.14$, $p < .05$)、交際期間と過ごす時間は安心感とのみ弱い正の相関関係がみられた($r = .15$, $p < .05$)。通話時間については、安心感、よい刺激、誠実さの 3 つの因子とは有意な正の相関がみられたが(*r*s = .13 - .22, *p*s < .05)、自立性との相関は有意ではなかった。さらに、メールの回数は、よい刺激と自立性のみ弱い負の相関がみられた(*r*s = -.14, -.15, *p*s < .05)。

さらに、魅力の各因子が関係継続動機に与える影響をみるために、関係継続動機を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、安心感と誠実さが関係継続動機に影響を与えており、特に安心感の影響が強かった(Table 4)。

重要性に基づくクラスター分け

個人にとっての重要さに基づいて対象者を分類するために、因子分析によって得られた各因子の因子得点に対して Ward 法によるクラスター分析を行った。解釈の明瞭性を考慮して、クラスター数を 4 とした。さらに、クラスターごとの特徴をつかむために、クラスターを要因とし、因子得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行った。その結果、すべての因子においてクラスター間の有意差がみられた(*F*s (3, 198) = 43.90 - 90.84, *p*s < .01)。それぞれの因子における多重比較の結果を Table 5 に示す。この結果から、第 1 クラスターは「安心感重視型」、

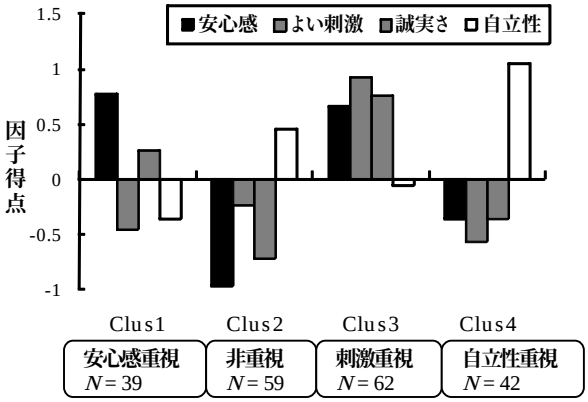

Figure 1 各クラスターの平均値とクラスター名

第 2 クラスターは「非重視型」、第 4 クラスターは「自立性重視型」とした。

第 3 クラスターについては、自立性以外はどの因子も高い得点であったが、他のクラスターと比較してよい刺激が特に高いことから、「刺激重視型」とした(Figure 1)。

最後に、これらのクラスターによって魅力の因子が関係継続動機に及ぼす影響が異なるのかを検討するために、関係継続動機を目的変数、魅力の各因子を説明変

Table 5 クラスターごとの各魅力因子の平均値と
多重比較の結果

	Clus1	Clus2	Clus3	Clus4
安心感	0.78A	-0.96C	0.66A	-0.36B
よい刺激	-0.46B	-0.23B	0.92A	-0.57B
誠実さ	0.26B	-0.72D	0.76A	-0.36C
自立性	-0.36C	0.46B	-0.05C	1.05A

注) 行内の異なるアルファベット間で有意差があることを示す

Table 6 クラスターごとに行った重回帰分析の結果、標準偏回帰係数と決定係数

	安心重視	非重視型	刺激重視	自立性重視
安心感	.44*	.47*	.42*	.27*
刺激	.10	-.12	.09	.36*
誠実さ	.22	.18	.06	.19
自立性	.06	.07	.04	.02
R^2	.38	.32	.25	.24

注) * $p < .05$ ** $p < .01$

数とする重回帰分析(ステップワイズ法)をクラスターごとに行った(Table 6)。その結果、自立性重視型以外のクラスターでは、安心感のみが関係継続に対して正の影響を有していた(βs = .44, .47, .44, ps < .05)。一方、自立性重視型では、安心感も関係継続動機に対して正の影響を及ぼしていたが(β = .27, p < .05)、それ以上によい刺激因子が最も強く影響していた(β = .36, p < .05)。

考察

本研究は、同性友人に感じる魅力がどのようなものであるかを検討するために自由記述調査を行い、項目を選定して因子分析を行った。また、個人にとっての重要性の観点から、それらの因子が関係継続動機にどのような影響を及ぼすかを検討した。

同性友人に感じる魅力

因子分析の結果、友人に感じる魅力は、「安心感」、「よい刺激」、「誠実さ」、「自立性」の4因子構造であることが明らかになった。従来の対人魅力尺度(e.g., 中村, 1988)は、主に「情緒的魅力」、「課題遂行能力」の2次元であり、また、対人認知では「個人的親しみやすさ」、「力本性」、「社会的望ましさ」が基本的な3次元とされている(林, 1978)。本調査で得られた因子は、これらの次元と対応していると考えられる。すなわち、感情的な魅力として安心感、相手の能力の高さとしてよい刺激、社会的な望ましさとして誠実さ、とそれぞれ対応している。そして、友人に対して感じているものであることから、単なる感情的な魅力ではなく、安心感を与えるもの、能力の高さだけでなく自分にとってのよい刺激、とそれぞれ初対面でもつ対人的印象以上の意味づけがなされているのであろう。

さらに、友人に特徴的な因子としては「自立性」が見出された。これは初対面の他者に感じる魅力では考えにくいものである。なぜなら、初対面、すなわち関係の初期段階では、相手との距離を縮めようと動機づけられている。そのときに相手との距離が感じられるということは、関係の発展を阻むものとなってしまい、魅力というよりはむしろ、マイナスの機能をもつものとなってしまう。ところが、友人関係が確立されると、相手との距離が重要になる。つまり、友人関係とは、互いに頼れる存在でありながら、常に密着した依存性の高い関係が望まれているというわけではないことが示されている。また、この因子は恋愛関係と異なる点であるとも考えられる。恋愛関係は、一般に友人関係よりも親密さが高い関係である(e.g., Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989)。また、排他性の高い関係であり、相手との一体感が重要となる。そこでは、やはり相手との距離を詰めることが指向されているため、距離感を感じることはマイナスとみなされるであろう。

さらに、行動特性との関連をみてみると、安心感は会う回数、電話の回数、メールの回数以外とはすべて正の相関関係がみられた。すなわち、接触する頻度ではなく、1回あたりの接触時間や影響の強度が安心感と強く関連している。一方、安心感と会う回数とは、弱いながらも負の相関関係が示され、頻繁に会うことで安心感が低下する可能性が示唆された。友人関係が長く続くと、会わなくても仲がよい関係になっていくが、会う回数が多いということは、まだそこまでの段階に達していないということであろう。安心感には「会わなくても自然に話せる」という項目が含まれていることから、安心感と会う回数との負の相関関係がみられたと考えられる。西浦・大坊(2007)では、接触頻度に注目して同性友人を検討しているが、接触頻度の多い友人関係を長く続けると好意度が低下することが示唆されている。安心感が友人との関係継続動機と強い関連があることを併せて考えると、接触頻度の多さがネガティブな側面をもつ可能性が十分にある。この点に関しては、今後、明らかにすべき問題である。

よい刺激因子は、主観的親密感や影響の強さと正の相関関係がみられた。自分にとって相手が刺激になるということは、それだけ相手から受ける影響が強いということである。メールの回数とは弱い負の相関がみられたが、携帯電話によるコミュニケーションは、近年、盛んに研究されており、友人関係の様相も変化していることがうかがえる(松田, 2000)。メールのやりとりは緊張をともなわず、気楽にできることから電話よりも親和感情を生み、また、情報もすぐに伝達できるという利点がある(岡本・高橋, 2006)。すなわち、頻繁にメールをすることで相手との親密感は高まるが、緊張感が薄れ、刺激と感じられることも減るのではないだろうか。メールによるコミュニケーションの普及により、対面のときに比べて相手とのコミュニケ

ーションにともなう時間的な制限が緩和され、相手の情報がより多く得られるようになった。しかし、その半面、例えば相手について知りたいと思う動機も低減し、相手のことを刺激になる存在とは感じられなくなるのかもしれない。しかし、本研究ではメールでのコミュニケーションの内容を特定するまでに至らず、この点については暫定的にしか解釈できない。メールによるコミュニケーションは自己開示につながる内容のものばかりでなく、メールを単なる連絡の手段として用いているとも考えられる。今後、魅力と携帯電話によるコミュニケーションとの関係について、さらなる調査を進めることで、この点は明確になるであろう。

誠実さ因子は、安心感因子と相関パターンは似通っているが、両者を比較すると、誠実さ因子の方が、全体的に相関関係が弱かった。また、自立性因子は、よい刺激因子と相関パターンが似通っており、比較するとこちらも全体的に弱い相関関係であった。さらに、安心感とよい刺激が行動特性とはそれぞれ異なる相関関係を有していた。すなわち、安心感と誠実さ、よい刺激と自立性が相関関係のパターンからは似たものと見なせるようである。

また、関係継続動機に及ぼす影響としては、安心感が最も強かった。すなわち、友人関係の継続を規定するものは安心感の魅力であると考えられる。一緒にいて緊張せず、落ち着いて過ごせるような関係であることが、今後も関係を続けていきたいと思わせる第一の要因となる。この特徴は、愛着理論(Bowlby, 1969)におけるセキュア・ベースや、ソーシャル・サポートの情緒的サポートとも共通するところがある。これらはいずれも対人関係の開始やあり方に非常に重要な影響をもつものである(e.g., Hazan & Shaver, 1987; 中村・浦, 2000)。よって、安心感が最も強い影響を及ぼしていたことも妥当な結果であったと考えられる。

そして、関係継続動機は、誠実さとも正の関係があることが示された。この結果より、友人関係には、相手がまじめで信頼できることが重要な条件であることもうかがえる。一方、よい刺激と自立性は重回帰分析からは関係継続動機への影響がみられなかった。しかし、相関係数はどちらも関係継続動機との間に正の係数が得られていた。すなわち、よい刺激、自立性と関係継続動機の間に安心感が媒介している可能性が示唆された。友人の魅力の各因子は因子間相関が高く、直接関係継続動機に影響を与えていたのは安心感と誠実さであったが、間接的によい刺激と自立性も影響を与えていることが十分に考えられる。このことは、安心感の魅力は友人の魅力を包括するものである可能性も同時に示唆している。相手が自分にとって刺激であり、依存しない関係を保っていることが、安心にもつながるのであろう。この魅力の因子間の関係については、今後も詳細に検討し、明確にすべきである。

なお、本調査での因子分析において得られた自立性因子は、α係数が.62 と低く、信頼性にやや問題があった。項目数が他の因子と比べて少ないことからも、今後、項目内容を見直し、尺度を改善すべきである。

個人にとっての重要性からの考察

個人が重視するものによって対象者を分類したところ、「安心感」、「刺激」、「自立性」の各因子を重視するタイプと、比較的どの因子も重視しないタイプの 4 つに分かれた。関係継続動機に対する魅力の各因子の影響を全体でみたときには、安心感が強い正の影響を与えていた。この結果がクラスターによって異なるのかどうかを検討したところ、安心感重視、刺激重視、非重視の 3 つの群では同様に安心感のみが関係継続動機に強い影響を及ぼしていた。また、自立性重視クラスターでも有意な正の影響がみられた。これは、同性友人関係において、相手に安心感を知覚できることが関係継続にきわめて大きな役割を果たしていることが示されている。

しかし、自立性重視クラスターにおいては、安心感よりも刺激を感じる方が、関係を継続したいという動機を高めていた。自立性を重視するということは、相手も自分も、互いに自己をきっちり持ち、依存しすぎない関係を持ちたいという気持ちがより強いということの表れだと考えられる。相手と一緒にいて心が安らぐ安心感が相手との心理的近さによるものであるとすると、よい刺激とは、相手と自分との間にある程度の距離が存在するために、相手が刺激となる可能性が考えられる。ゆえに、自立性重視が刺激と関係継続の関連の強さとなって表れたのであろう。

一般的には、個人が重要と考えるものが、最も関係継続に影響を及ぼすことが予想される。例えば、よい刺激を重要と考える人は、友人によい刺激を感じることが最も関係を継続したいと思わせる要因になるであろう。しかし、本研究の結果はこれを否定し、どの因子を重要視する場合でも一貫して安心感の強い影響が示された。安心感は愛着理論におけるセキュア・ベースを得ることで感じられ、対人関係の基盤となるきわめて重要なものである。よって、友人関係における安心感の機能に関してさらなる追及が望まれる。ただし、クラスターによっては安心感以外の因子の重要性も示されたことから、その個人が何を重要と考えているかは関係継続において考慮すべき視点と言えるであろう。

まとめと今後の展望

本研究では、友人の魅力の因子構造が安心感、よい刺激、誠実さ、自立性の 4 因子構造であることを明らかにした。魅力は関係を維持させる要因であるため、今後、こ

れらの因子をどのように維持することが関係にとってよい状態であるのかを明らかにする必要がある。

また、全体としてみれば 4 つの因子のうち安心感が関係継続に最も重要であることが示されたが、個人にとっての重要性の観点から考えると、それ以外の因子の重要性も考慮すべきである。そして、因子間の関連から友人に感じる魅力を包括的に考えられるようなモデルの構築が求められる。

引用文献

Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.

Aron, A., Dutton, D. G., Aron, E. N., & Iverson, A. (1989). Experience of falling love. *Journal of Social and Personal Relationships*, **6**, 243-257.

Berscheid, E. S., Snyder, M., & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 792-807.

Berscheid, E. S., & Walster, E. (1969). *Interpersonal attraction*. Addison-Wesley.
(蜂屋良彦(訳) (1978). 対人魅力の心理学 誠信書房)

Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, Vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books.

Byrne, D. (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.

Davis, K. E. (1985). Near and Dear: Friendship and love compared. *Psychology today*, **19**, 22-30.

遠藤由美 (1992). 自己認知と自己評価の関係―重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討― 実験社会心理学研究, **40**, 157-163.

Fehr, B. (2004). Intimacy expectations in same-sex friendships: A prototype interaction-pattern model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**, 265-284.

藤森立男 (1980). 態度の類似性、話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果―魅力次元との関連において― 実験社会心理学研究, **20**, 35-43.

林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, **25**, 233-247.

Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.

Huston, T. L. (1974). *Foundations of interpersonal attraction*. New York: Academic Press.

厚生労働省 (2010). 平成 21 年 人口動態統計の年間推計 厚生労働省 2010 年 1 月 1 日＜http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei09/index.html＞ (2010 年 1 月 10 日)

久保真人 (1993). 行動特性からみた関係の親密さ―RCI の妥当性と限界― 実験社会心理学研究, **33**, 1-10.

楠見幸子・狩野素朗 (1986). 青年期における友人概念発達の因子分析的研究 九州大学教育学部紀要, **31**, 97-104.

La Gaipa, J. J. (1977). Testing a multidimensional approach to friendships. In S. Duck (Ed.), *Theory and practice in interpersonal attraction*. Academic Press.

松田美佐 (2000). 若者の友人関係と携帯利用―関係希薄論から選択的関係論へ― 社会情報学研究, **4**, 111- 122.

松井 豊・山本真理子 (1985). 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響 社会心理学研究, **1**, 9-14.

中村佳子・浦 光博 (2000) ソーシャル・サポートと信頼性との相互関連について―対人関係の継続性の視点から― 社会心理学研究, **15**, 151-163.

中村雅彦 (1988). 非類似の他者に対する魅力―評価者の寛容的対人態度に関する検討― 実験社会心理学研究, **27**, 121-130.

中村雅彦 (1996). 対人関係と魅力 大坊郁夫・奥田秀宇(編) 対人行動学研究シリーズ 3 親密な対人関係の科学 誠信書房 pp.23-58.

西浦真喜子・大坊郁夫 (2007). 会わなくても親しい友人―友人関係態度の研究― 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 540-541.

岡本 香・高橋 超 (2006). 親密度およびコミュニケーション形態の違いがメディア・コミュニケーションに及ぼす影響 実験社会心理学研究, **45**, 85-97.

奥田秀宇 (1993a). 対人魅力における定量的モデルの検討 社会心理学研究, **8**, 126-133.

奥田秀宇 (1993b). 態度の類似性と仮想類似性―対人魅力に及ぼす効果― 実験社会心理学研究, **33**, 11-20.

奥田秀宇 (1999). 対人魅力における重要性効果―被験者間および被験者内計画による検討― 実験社会心理学研究, **39**, 114-120.

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, **44**, 55-65.

Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.

Sprecher, S. (1998). Insiders' perspectives on reasons for attraction to a close other. *Social Psychology Quarterly*, **61**, 287-300.

戸田弘二 (1994). 刺激人物に関する情報量と対人魅力における身体的魅力の効果―美しさは皮一枚― 対人行動学研究, **12**, 23-34.

山本真理子 (1986). 友情の構造 人文学報, **183**, 77-101.

和田 実 (1993). 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67-75.

註

1) 本論文は、第一著者の修士論文(平成 20 年度大阪大学大学院人間科学研究科)の一部に加筆修正したものである。なお、本研究の一部は日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会(2009)において報告された。

対人社会心理学研究, 10, 2010

The relationships between attraction of same-sex friend and relationship-maintenance motivation in the light of personal importance

Makiko NISHIURA(*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
Ikuo DAIBO(*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purpose of this study is to clarify what is interpersonal attraction of same-sex friends, and to clear up its effects on relationship-maintenance motivation in terms of personal importance. Two hundred and two undergraduates responded the questionnaires about their same-sex friendships. They rated how attractive they regarded their friends by using friends' attraction scale, which made through preliminary study. Also, they answered the degree to which each item on the scale was important to them. The results showed mainly three findings as below. First, factor analysis of friends' attraction indicated four factors; security, stimulus, faithfulness, and independence. Second, based on importance to the participants, they were divided into four clusters; security-emphasis, stimulus-emphasis, independent-emphasis, and non-emphasis. Finally, in independent-emphasis cluster, stimulus had a most strong effect on the relationship-maintenance motivation. In every other cluster, security had a strong effect on that. The discussion considered the relationships between friends' attraction and relationship-maintenance motivation and the role of personal importance in those relationships.

Keywords: interpersonal attraction, same-sex friend, relationship-maintenance motivation, personal importance.